

有島武郎『或る女』におけるヒステリー：葉子の破滅を中心に読み直す

朴, 美姪

九州大学大学院地球社会統合科学府：博士課程

<https://doi.org/10.15017/1909538>

出版情報：Comparatio. 21, pp.45-58, 2017-12-28. Society of Comparative Cultural Studies, Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



有島武郎『或る女』におけるヒステリー ―葉子の破滅を中心に読み直す―

朴美姪

はじめに

有島武郎の代表作である『或る女』は、一九一一年(明治四四)年一月から一九一三(大正二)年三月まで、「或る女のグリンプス」(以下、「グリンプス」と略す。)という表題で、雑誌「白樺」に一六回にわたって連載されていたが、一九一九(大正八)年三月、この連載が改稿加筆され、全四九章中二二章までが有島武郎著作集第八輯『或る女』前編として、叢文閣より出版された。次いで、二二章以下が書き下ろされ、同六月、著作集第九輯『或る女』後編として、同じく叢文閣より出版された。

『或る女』の女主人公葉子は、婚約者木村をたずねてアメリカに渡航中、既婚者であった絵島丸の事務長倉地に心ひかれ、不倫を起してしまふ。結末にいたっては、婦人病の手術の失敗やヒステリーの激化の結果、身体も精神も破滅して行く葉子が描かれている。

葉子を破滅させる重要な要因となっているヒステリーについては、多くの先行研究の中で論じられている。江頭太助は、有島が改稿加筆の際に、参考にしたと言われるハヴロック・エリス(Havelock Ellis)の『性の心理』(*Studies in Psychology of Sex*)の影響について論じ、ヒステリー研究の影響を指摘している(注一)。坪井秀人

は、『或る女』に著しく見られる「ヒステリーと女性の気質と身体(とりわけ子宮)とを短絡させる思考は、同時代の医学的知見から見ても時代錯誤的な水準にあった」(注二)という山本芳明の見解に賛同しながらも、「この頃の医学のディスクールは倫理的あるいは文学的なディスクールから十分には自立しておらず、むしろ倫理的・文学的な価値観が医学的判断に影響し、あるいは医学的な(真実性)の装いが倫理的判断を規定するというのが実情であった」(注三)と指摘している。また、小坂晋は『或る女』と『アンナ・カレーニナ』―比較対比研究序説―の中で、「構造上、両作品の共通点は、(中略)激烈なヒステリーで破滅して行く漸層的な手法である」(注四)と指摘している。

以上のように、『或る女』研究において、ヒステリーは一つの重要なキーワードとしてヒステリーを定着していることが分かる。有島は主人公葉子を破滅させる主な要因としてヒステリーを用いている。本稿では、有島武郎はなぜヒステリーを葉子の破滅の要因にしたのか、時代的にヒステリーが流行したとしても、性科学的な知識を用いてまでヒステリーにした理由はなぜだろうかという疑問から出発しており、それを明らかにすることによって新たな解釈を試みたいと思う。

一 「或る女のグリンプス」におけるヒステリー観(子宮病)

ヒステリーの起源は、おそらく女性が生れた太初から始まったのかもしれない。記録からみると、子宮を語源とするヒステリーは、「古代エジプトでは、多数の障害は、子宮が身体の上部に移動する

ことから起こる」(注五)、「子宮はかなりの自律性と移動能力をもった動物に似た生き物である」(注六)と考えられ、所謂「子宮の窒息」から引き起こされる一つの症状とされていた。「子宮の窒息」は古代古典全体にわたってヒステリーを起す主な病因となっていたのであり、そのような起源をもつヒステリーは自然に女性の病とされたのである。特に、一九世紀には「子宮と卵巣と中枢神経はたがい結びついており、生殖機能のアンバランスや感染などは女のからだのすみずみにまで「反射」して不調を生じると考えられていた」(注七)が、その中にはヒステリーも含まれていた。ヒステリーについては所謂「女性固有の不安定性と病弱性」(注八)が強調され、女性の社会的進出に「猛反対する論拠として使われた」(注九)のである。

このようなヒステリーが日本で初めて登場するのは、一八五七(安政四)年刊行の『扶氏経験遺訓』からであるとされているが、一般的に用いられるのはおそらく明治期からであろう。明治期におけるヒステリー言説では、「喜斯的里はひとり婦人の病にして、本来子宮の疾患に係る」(注一〇)、「下腹部に於て烈しい疼痛が起り」(注一一)などと婦人病との関係について述べられている。また、糸左近『男女学問病』では「ひすてり(ちのみち)」の項に「十五歳以上の婦人に多い病で、精神感動即ち驚き或は怒り、或は心配事などから起るが多い、又子宮病からもなる」(注一二)とあるように、ヒステリーと婦人病(血の道)と同様の病気として分類していることが分かる。このようなヒステリーと婦人病とを関連付けたヒステリー観は、「グリンプス」から『性の心理』を参考にして改作された

『或る女』まで一貫してあらわれている。次の場面は、「グリンプス」の田鶴子が悲しみに暮れ、泣き出す場面である。

急に……急に何処をどう潜んで来たとも知れぬいやな淋しさが伏兵のやうに田鶴子を襲った。船に乗つてから春の草のやうに萌え出した元気はぼつきりと追つたやうにしをれてしまった。(中略)今は船室に返る気力もなく、右手でしっかりと額を抑へて、手欄に顔を伏せながら念じでもするやうに眼をつぶつて見ても、云ひやうない苦しさ淋しさはやまなかつた。田鶴子はすぐに殊に自分に激しかつた悪阻つはりの苦痛を思ひ起した……定子……(中略)背を波うたして深い悲しい溜息が出るのをやめようとしても甲斐がなかつた。(注一二)

乗船してから三日目の夕方に、初めて食堂に出た田鶴子は「事務長の挙動を仔細に見る事に気を奪われて居た」(「グ」一三三頁)が、事務長倉地の冷淡な態度に「淋しさ」を感じ、「悲哀が何処からともなく襲ひ入」(「グ」一三三頁)り、ヒステリックに泣き出す。ヒステリーの症状としては、ヒステリー言説の中でもよく挙げられている頭痛や嘔吐の症状が用いられているが、嘔吐の症状に対しては「悪阻の苦痛」とあるように、妊娠した時の嘔吐の症状と同じような症状として表現されている。次の場面は、倉地の心を確認した田鶴子がシアトルに上陸せず、倉地と一緒に帰国するために、船医の興縁が考え出した仮病を使い、木村を騙そうと決心する場面である。

田鶴子は黙つて、皆んなの云ふ事を聞いてゐる中に、興録の云ふ事がやはり一番實際的だと考へた。而して慣々しい調子で興録を見やりながら、

「興録さん、さう仰れば私仮病ぢやないんですの。此間中から診ていたゞかうか知らと幾度か思つたんですけれども、あんまり大袈裟な様で我慢して居たんですが、どう云ふもんでせう——少しは船に乗る前からでしたけれども——お腹の此所が妙に時々痛むんですの」

と云ふと、夫れを聞きながら寝台に曲がりこんだ男はひとりでにやりやり笑つて居た。田鶴子は一寸其男を睨らむやうにして一緒に笑つた。(中略)

倉地と二人になつてから事務長は軽々と田鶴子を膝の上に乗せて、後れ毛をいたづらしながら、

「本統かな腹の痛むのは。子宮だらう」「まさか」

二人は顔を見合はして笑つた。(中略)

田鶴子は冗談のやうにして興録に病氣の事を云つたが、實際可なり長い間子宮を害しているらしかつた。腰を冷やしたり、感情が激昂した跡には屹度収縮するやうな痛みを下腹部に感じて居た。船に乗つた当座は暫く忘れるやうに此不快な痛みからのがれることが出来て、幾年ぶりで欠陥のない健康なよろこびを味へたのであつたが、近頃は段々とひどく痛みを覚えるやうになつて来た。(「グ」一八二—一八三頁)

實際長い間子宮を害していた田鶴子は仮病ではないことを訴える

のだが、誰も信じようとしない。倉地だけが田鶴子の言葉を聞き、妊娠を疑うが、田鶴子は倉地に出会う前から腹部に痛みを感じていて、自分の子宮に異常があると疑つていたため、妊娠の可能性を否定する。子宮に異常があると疑える症状として「腰を冷やしたり、感情が激昂した跡には屹度収縮するやうな痛みを下腹部に感じて居た」とされているが、この表現からヒステリーと婦人病を関連付けていることが分かる。『或る女』後編において「船の中にいる時にヒステリーになつたのではないかと疑つた事が二三度ある」(注一四)と回想する場面があるが、「グリーンプス」及び『或る女』前編においてヒステリーという言葉が直接用いて疑う場面は、「ヒステリーに罹つて居るのではないか」(「グ」一一八頁、『或る女』七四頁)という箇所しかないため、子宮の異常を疑う場面を、ヒステリーを疑う場面としてみることができると考えられる。

以上のように「グリーンプス」の中で見られる婦人病と関連づけたヒステリー観は、改作後の『或る女』においても一貫してあらわれている。船越幹夫は「ヒステリーは感情に関わる領域で使われることが多い」(注一五)と指摘しているが、有島の場合はほとんど感情の表現としてはヒステリーという言葉が直接用いておらず、ヒステリーに関わる精神的な症状と肉体的な症状の両方を用いて、女主人公のヒステリーを表現している。特に、ヒステリーと婦人病を関連づけたヒステリー観が一貫してあらわれているのは、おそらく糸左近がヒステリーと婦人病(血の道)とを同じ病氣として分類した「ひすてり(ちのみち)」のように、「ヒステリー＝婦人病」という図式が

有島のヒステリー観を支配していたからではないかと考えられる。

二 『或る女』におけるヒステリー観(遺伝性)

明治末期から大正期にかけてあらわれているヒステリー言説の中で、目をひくのは遺伝性という考え方である。一九一〇(明治四三年)に刊行された児玉修治『健脳法』には、精神病の原因について以下のように記されている。

父母又は祖父母が神経病者であつたとか、或は精神病系統であつたとか、乃至糖尿病、ヒステリー、大酒家等は何れも脳に故障を生じてゐるものだから、それが子々孫々にまで禍をのこすやうになる。(注一六)

また、杉江董『ヒステリーの研究と其療法』(一九一五)には、「遺伝中、最も多きは直接遺伝、即ち両親からの遺伝であつて、両親にヒステリー、神経病、精神病がある場合である」(注一七)と記されている。このようなヒステリーの遺伝性は、「グリーンプス」ではあらわれておらず、『性の心理』を参考にして改作された『或る女』からあらわれているといえる。特に、母親の親佐から葉子へというヒステリーの遺伝は、「嫉妬」という感情を中心にあらわれている。

親佐と葉子の敵対関係という設定は改作する前の「グリーンプス」でも同じく用いられているが、この場合はヒステリーの遺伝の根拠とはいえない状態である。しかし、同じような関係設定が『或る女』においてはヒステリーの遺伝性をあらわす要素となっている。

殊に葉子の母が前から木部を知つてゐて、非常に有為多量の青年だと讚めそやしたり、公衆の前で自分の子とも弟ともつかぬ態度で木部をもてあつかつたりするのを見ると、葉子は胸の中でせむら笑つた。(中略)

その中に二人の間柄はすぐ葉子の母に感づかれた。葉子に對して兼ねてからある事では一種の敵対を持つてさへゐるやうに見えるその母が、この事件に對して嫉妬とも思はれる程嚴重な故障を持ち出したのは、不思議でないと云ふべき境を通り越してゐた。世故に慣れ切つて、落付き拂つた中年の婦人が、心の底の動搖に刺戟されてたくらみ出すと見える残酷な譏計は、年若い二人の急所をそろそろと窺ひよつて、腸も通れとつき刺してくる。(二三頁)

木部に対して自分の子とも弟ともつかぬ態度を取つていた母の親佐が、木部と葉子の関係に気づき、嫉妬するような場面が描かれている。この場面は「グリーンプス」でも同じように描かれている(「グ」七〇頁)が、『或る女』においては「一種の敵対」、「嫉妬」の言葉の増補によつて、親佐の葉子に對するヒステリックな心理状態はより強調されている。この場面では親佐がヒステリーであるような症候は詳細に描かれていないが、同じ線上にあるといえる葉子と愛子の敵対関係についての場面と類似していることから、親佐にも葉子と同様にヒステリーであつたということができるとはならないかと考えられる。

『或る女』の後編において、葉子が弟同様の少年である岡と妹の愛子との関係を疑い、嫉妬してヒステリーを起す場面は、親佐が葉子と木部の関係に気づき、嫉妬する場面と類似している。また、「親佐と葉子との二人に同時に慇懃を通じてゐると云ふ、全紙に亙つた不倫極る記事」(二六頁)が報じられる場面では、噂に過ぎないスキヤンダルであっても、親佐と葉子が異性相手に対してライバルのような関係におかれているが、葉子と愛子も同様な関係におかれている。

倉地が外妻を二人持つてると云ふ噂は初耳ではあるけれども、それは新聞の記事であつてみればあてにはならない。その外妻二人というのが、美人屋敷と評判のあつたそこに住む自分と愛子位の事を想像して、記者ならば云ひそふ事だ。

唯さう軽くばかり思つてしまつた。(四三三頁)

娘である葉子に対する親佐の心理状態、異性相手に対して競争しているような葉子との関係設定は、妹である愛子に対する葉子の心理状態や関係設定と軌を一にしているといえる。つまり、葉子の愛子に対する嫉妬心が葉子を妄想させ、ヒステリーは激化されるが、このようなヒステリーの症状は葉子と同じ立場であつた親佐にもあつたといえよう。また、『或る女』において「性質が母親と何処か似過ぎてゐる為か」(二五頁)と親佐との性質の類似さが増補されており、「グリーンプス」において不明であつた親佐の死因が「親佐が病氣になつて危篤に陥つた」(二六頁)と改作されているのは、おそ

らくヒステリーによつて破滅して行く葉子が、母の親佐と同様に死ぬという伏線をあらわしたのではないかと考えられる。

西洋における魔女狩りでは、「魔女の子供はたいいの場合、悪魔との関係によつて生まれ、誕生のときからすぐに悪魔に捧げられている」(注一八)とされたため、母親が魔女であれば娘も魔女であつたとされていたが、「悪魔に(中略)とりつかれた人、あるいは悪魔のような人(demoniac)はすべてメランコリー」(注一九)であつたとされている。メランコリーは「ヒステリーにその属性の一つを伝える」(注二〇)とされたため、ヒステリーは悪魔憑きの症状としてあげられていた。日本においては「憑かれる者は大抵女である」(注二一)とする狐憑きの症状としてヒステリーがあげられているが、一九〇二(明治三五)年に公刊された門脇眞枝の『狐憑病新論』の中では、「有遺伝のものに多し」(注二二)と遺伝性が指摘されている。このような悪魔憑依や狐憑きの主な症候として挙げられているヒステリーに付加された遺伝的素因は、ヒステリーに罹つた女性に対する偏見と差別を誘発させる要因となつていゝといえる。「グリーンプス」と『或る女』に同じく用いられている親佐と葉子の敵対関係は、『或る女』において葉子と愛子の敵対関係を強調することによつてヒステリーの遺伝性をあらわす要素となつていゝといえる。親佐と葉子のヒステリーは嫉妬という感情がもとになつていゝが、おそらく改作の際に参考にしたといわれるハヴロック・エリスの『性の心理』の影響からではないかと考えられる。『性の心理』から得られたヒステリーと女性の性生活・性本能との関係性についての新たな知識によつて、ヒステリーと女性の性的欲求が結びつけられ、また、嫉

妬という感情が強調されることによってヒステリーとして表現されていると考えられる。

三 「本能的な生活」とヒステリー

有島武郎の一九一六(大正五)年三月二七日付の日記には「本棚に置いて自慢できる本は何冊か買った」(注二三)と記されているが、その「何冊か」の中にはハヴロック・エリスの『性心理学の研究』が含まれていた。次の日の三月二八日付の日記には、次のように記されている。

午から夜遅くまで『ローマ史』(Roman History)少しとエ

リスの『性心理学の研究』(Psychology of Sex)を全部読む。

特に後者から多くの知識と示唆を與えられた。性生活における女性の心理や、ヒステリーと性本能との間の關係など、いくつかの事實を学んだ。これはうまく扱えば稀に見る文學作品に仕上がるだろう。『或る女のグリンプス』を書き變えるのに有用な點が數々得られた。(注二四)

「多くの知識と示唆を與えられた」という記述から具体的な内容を計ることができないため、『性の心理』のどの部分が参考にされたかということは『性の心理』の影響に関する研究において常に問題とされている。江頭は「性生活における女性の心理」「ヒステリーと性本能との間の關係」の二項目に焦点を絞り、その二項目を満足させる研究は『性の心理』全七巻のうち、第一巻の「Auto-erotism」

の章であるとし、「Auto-erotism」の章を中心に考察を進めているが、本稿では「性生活における女性の心理」「ヒステリーと性本能との間の關係」の二項目からキーワードを絞り、そのキーワードを中心に『性の心理』の影響について考察を行いたいと思う。なぜなら『性の心理』に関する記述が見られるのは日記だけであり、『性の心理』から得た具体的な知識としてははっきりといえるのは、この二項目のみであるからである。有島が残した唯一の痕跡であるこの二項目からキーワードを絞ってみると、反復的に用いられている「性」という言葉が見出される。つまり、女性の「性生活」、女性の病であるヒステリーと「性本能」の二項目が指しているのは、女性の「性慾」ではないかと考えられる。

『性の心理』の影響によって変化した有島のヒステリー観が、『或る女』においてどのようにあらわれているかについて考察を行う時、ヒステリーの症状ではなく、ヒステリーの原因に焦点を当ててみようと思うが、その理由はヒステリーの症状が人により、もしくは環境により、その有り様が様々であるからである。次は糸左近『無薬療法』の中でヒステリーとしてあげられている症状であるが、精神的と肉体的とに分けて述べられている。その症状をまとめてみると以下のようである。

「精神的症状」

嫉妬深くなる、我儘になる、感情が変る、懦弱になる、物を銜う様になる、記憶が悪くなる、嘔吐になる、欺かれ易くなる、臆病になる、迷信になる、幻覚錯覚がある等

「肉体的症状」

頭痛、眩暈、月経不順、汗かき、妙な癖が出る、便秘する、睡眠不良、消化不良、顔色が悪くなる、熱が出る、痙攣、麻痺、知覚喪失、人事不省、身体衰弱等

(注二五)

糸左近が挙げているヒステリーの症状は、『グリンプス』と『或る女』においても同じく見られる症状である。このような症状の類似さからみると、有島がヒステリーについての知識を糸左近の『無薬療法』から得たということが推測できなくもないのであろう。つまり、ヒステリーの症状は多様であるため、ヒステリーの症状については『性の心理』を参考にすると判断することは非常に難しいと考えられる。そのため、ヒステリーの症状を参考にはするものの、ヒステリーの原因を中心に有島のヒステリー観について考察を行いたいと思う。

「グリンプス」のヒステリーにはなく、『或る女』のヒステリーにはあるといえるのは、ヒステリーに付加された性欲であろう。つまり、女性の性的本能とヒステリーとの関係というのが『性の心理』から得られた最も重要な知識であり、それが『或る女』の改作において大きな影響を及ぼしたと考えられる。

明治期におけるヒステリーの病因論は、子宮説が主に述べられ、婦人病や生殖器による病からなるとするのが一般的であったが、性欲の関係については、「決して情の昂進ではない」(注二六)、「色情の亢進は甚だ稀にして、往々色情感覚の完全なる冷靜を認む」(注二七)とあるように否定されている。ヒステリーの原因を性的欲求不満

によるものとする性病因論が一般的に用いられるのは、大正期からであり、有島が『性の心理』を購入した一九一六(大正五年)という年もまたその時期である。このような有島のヒステリー観は『或る女』の中でどのように描かれているのだろうか。

ある朝思いがけなく早起きをした葉子は甲板で偶然と岡に会う。岡は倉地が葉子に何か頼みたいことがあると言っていたことを伝えるのだが、それを名分にし、倉地に会おうとする葉子は「胸に時ならぬときめきを覚えて、眉の上の所にさつと熱い血の寄つて来るのを感じ」(二二〇頁)る。葉子は岡に頼んで倉地を起そうとするが、それに失敗した岡のお陰で葉子は直接倉地の部屋へ向かう。事務室の戸の前に来て「ノックをする隙もないやうなせかせかした気分になつてゐた」(二二二頁)葉子はほとんど無意識に部屋に入る。岡の声で寢床から起き上がったらしい倉地から要件について聞いていた葉子は、倉地の部屋に飾っていた倉地の妻子の写真を見て「自分の敵がどんな獣物であるかを見極めてやるぞといふ激しい敵愾心が急に燃えあが」(二二五頁)るのである。その時、葉子は突然倉地に襲われる。

葉子は倉地の大きな胸と太い腕とで身動きもできないやうに抱きすくめられてゐた。もとより葉子はその朝倉地が野獣のようなassault¹⁾に出る事を直覚的に覚悟して、むしろそれを期待して、そのassaultを、心ばかりでなく、肉体的な好奇心をもつて待ち受けていたのだったが、かくまで突然、

なんの前ぶれもなく起こつて来ようとは思ひも設けなかつたので、女の本然の羞恥から起こる貞操の防衛に駆られて、熱しきつたような冷えきつたような血を一時に体内に感じながら、(中略)葉子はわれにもなく異常な興奮にがたがた震え始めた。

* * *

(中略)倉地が部屋の戸に鍵をかけようとしているところだつた。鍵が合わないので、

「糞つ」

と後ろ向きになつてつぶやく倉地の声が最後の宣告のように絶望的に低く部屋の中に響いた。(中略)

葉子はいきなり寢床の上に丸まつて倒れた。そしてうつぶしになつたまま痙攣的に激しく泣き出した。倉地がその泣き声にちよつとためらつて立つたまま見ている間に、葉子は心の中で叫びに叫んだ。

「殺すなら殺すがいい。殺されたつていい。殺されたつて憎みつけてやるからいい。わたしは勝つた。なんといつても勝つた。こんなに悲しいのをなぜ早く殺してはくれないのだ。この哀しみにいつまでもひたつていたい。早く死んでしまいたい。……」(二二五〜二二六頁)

改作されたこの場面は「グリンプス」において倉地の肉体美に惹

かれながらも倉地の突発的な行動により羞恥心を感じた田鶴子が、倉地に対して懸命に抵抗を試みる。しかし、抵抗は失敗し、倉地の熱い唇を感じた田鶴子は羞恥心により、痙攣的に激しく泣き出す場面として描かれている(「グ」一五七〜一五八頁)。改作後の『或る女』においては、倉地の突発的な行動に葉子は羞恥心を感じながらも、野獣のようなassaultに出る事を期待している。倉地に対して懸命に抵抗する場面は削除されており、「異常な興奮にがたがた震え始めた」と増補されたこの描写からみると、葉子は羞恥心より性的興奮が高まつていたといえよう。倉地との接吻があつた場面は「* * *」の印に換えられ、曖昧になつており、その次の場面では興奮した倉地が部屋の戸に鍵をかけようとするが、それに失敗し、「糞つ」とつぶやく。その倉地の声が葉子に最後の宣告のように絶望的に低く響いたと改訂・増補されている。その後、残酷な悲哀により、痙攣的に激しく泣き出す葉子のヒステリーが描かれている。

『性の心理』の「羞恥心の進化」の項に、エリスがオーストリアの精神医学者アドラーの研究を引用して「女性の性的衝動は羞恥心によつて抑圧されるので、抑圧は絶えず克服されなければならないことになる」(注二八)と述べられている。改訂・増補されたこの場面では、葉子は性的衝動が羞恥心によつて抑圧され、自ら性的行動を行おうとはしないが、倉地に手籠めにされるまで自分の性的欲求が満たされることを期待しているのである。しかし戸に鍵をかけることに失敗した倉地によつて、期待していたことは叶わず、性的欲求は満足させられなかつたのである。

江頭は「羞恥心の進化」から、羞恥心は女性の媚態を発達させ、

魅惑的武器となっており、女性の色情的衝動の一表現として用いられていると指摘し、「羞恥心を倉地に対する葉子の媚態として表現し、またそれを「不可犯性」として倫理的にとらえた」（注二九）と述べている。

「グリーンプス」では、倉地に征服された田鶴子は「本然の羞恥から起る冷冽な侮蔑心がむらむらと胸に湧き、「血が一時に氷になつた」（「グ」一五七頁）とあるように主に屈辱、侮蔑といった羞恥心が原因でヒステリー発作を起す。一方『或る女』では「熟しきつたような冷えきつたような血を一時に体内に感じながら」倉地から自分の貞操を守ることのできた葉子が「なんといつても勝つた」と絶叫しながらヒステリー発作を起す。ここでのヒステリーの原因は、葉子の満足し得られなかった性的欲求不満からであるといえる。有島は『性の心理』を参考にして得られた知識から、女性の本能を強調する性欲を既存のヒステリー観に付加したと考えられるが、このようなヒステリーは『或る女』において、倉地に対する性的欲求が満たされないとヒステリー発作を起すという形で描かれている。

以上のように有島のヒステリー観は、子宮説に従つたような「ヒステリー＝婦人病」という図式を維持しつつ、「性病因論」とを統合したという点に特徴があると考えられる。しかし、性欲とヒステリーとの関係、つまり女性の本能的な生活の実現がヒステリーを通じてあらわれているのは、ヒステリーが女性の病であることをより強調させる結果になつたといえる。『或る女』において、ヒステリーの遺伝性があらわれているのは、明治という社会で親佐や葉子のような「新女性」が本能的な生活を実現したために、発病した病で

はないかと考えられる。婦人病を原因とするヒステリーと女性の性本能との関係を原因とするヒステリーは、いずれも「女性の性（そしてヒステリー）をめぐる強力な偏見と差別の連鎖」（注三〇）を助長する結果をもたらしているといえる。

四 有島武郎の女性解放思想

有島が描くヒステリーは、いずれも性差別的な要素をもっているといえるが、「日本の男性作家の中で最も深い共感と同情をもつて女性を書いた作家」（注三二）であると評されている有島は、なぜヒステリーを用いて葉子を破滅させたのだろうか。有島が持っていた女性に対する見解を考察することで、その疑問に対する答えを探ってみたいと思う。有島は女性についての文章を多数残している。有島の評論類を収めた筑摩書房版『有島武郎全集』の七、八、九、一五巻を中心に、有島の女性論を考察した江種満子は有島の女性論について次のように述べている。

有島は、資本主義社会の利益追求のシステムが一夫一婦の近代家族という家族制度を作り出し、その制度は女性に苛酷な拘束を加える性差別構造を根幹として成り立ち、結婚という性の形、貞操という性の道徳によって女性の行動の自由を奪い、女性の欲望の自由を奪い、永遠に性差別が続くことを求めて知的なたくらみをこらしてきたことを見抜いた。そしてそのことを、おそれることなく語り続けた。近代の知のたくらみが隠したものを暴きつづけた。（注三三）

有島の女性論は「性」の自由こそ女性の解放につながる道であるとし、経済的かつ政治的な女性の権利などについては、根本的な女性の解放につながることを指摘している。このような有島の女性論は「性」の自由という根本的な問題に焦点が当てられ、当時の女性解放運動が主張している女性の社会的な権利については、あまり求められていない。有島の言う女性解放は「結婚という性の形、貞操という性の道徳」から女性の自由を求めることにあるが、女性固有の「女らしさ」を強調している有島の女性言説からみると、多少矛盾しているように思われる。『或る女』の葉子において、このような有島の女性観が反映されていると考えられるが、女性の自立と解放に関する有島の評論から女性観を捉え、女性登場人物の分析を行った宮本侑佳は、『或る女』について次のように記している。

有島は女性解放に関する評論の中で、女性は眞の解放にあたり女性独自の社会を構築することが必要であり、「女子の天才」こそがその女子のみの世界を創り上げられるのだ、としている。「何時でも現在を一番楽しく過ごすのを生れながら本能としてゐる」葉子は、「女子の天才」への道を歩んでいたかもしれない。しかし結局「天才」にはなりきれなかった。気の進まない結婚をし、アメリカで安定した生活を手にすること、周囲の反対を押し切つて愛する相手と日本で暮らすこと、この二つの選択肢から後者を選んだ瞬間、葉子は目覚めようとする女性としての頂点を迎えると同時に、破滅

への道に踏み出したのである。(注三三)

宮本は、葉子が「二つの選択肢」から「アメリカで安定した生活を手にすること」を選ばず、「愛する相手」の倉地を選ぶことによつて、「天才」にはなりきれなかった」と指摘しているが、このような解釈は「女子の天才」をどのように理解するかによつて異なってくると思われる。ここでいう「女子の天才」は、有島が一九二〇(大正九)年一月号の『婦人之友』に発表した「内部生活の現象」の中で用いた言葉であるが、その内容は次のようである。

私は女子の天才に、換言すれば獨特の本能的生活に女性の開放を期待せずには居られません。天才とは自分自身を明確に知りぬき、さうしてそれを明かな形で表現し得る人の事です。女性に就いて云へば、女子が今まで男子から被つてゐた凡ての感化影響から全然獨立して、女性自身として考へ且つ行ふことです。これが本當の女子の覺醒であり解放でなければなりません。女性の固有の立場から人類の生活を觀察し、解決することです。(中略)かくして男子の立場からの生活様式と、女子の立場からのそれとが調和結合した、その上に人類の生活が建て上げられた時に、初めて男女は同じ水準の上と同じ権利と義務とを共有して、完全な生活を建設し得るものと私は信じます。

だから私の女性に望む所は、女性の中から眞の天才が現はれることです。即ち女子が知的生活から本能的生活に突入し

て、そこには本當の自己を見出すことです。(注三四)

有島は「女子の天才」という言葉を用い、女性の「本能的生活」を強調しているが、「自己を愛し、自己を知る」(注三五)ことが天才の重要な要件となっている。また、『惜しみなく愛は奪ふ』の中で、「個性は外界の刺激によらず、自己必然の衝動によつて自分の生活を開始する。私はこれを本能的生活 (Impulsive Life) と仮称しよう」(注三六)と述べられている。有島はこのような「本能的生活」を葉子を通じて描いているが、「間違つてゐた……かう世の中を歩いて來るんぢやなかつた。然しそれは誰れの罪だ。分らない。」(四三五頁)という葉子の独白からは、彼の思想が当時の社会には受け入れられないことが示唆されていると考えられる。つまり、有島の女性に対する「本能的生活」という思想そのものが、当時の社会には受け入れられ、その受け入れ難さを葉子を通じてあらわしていると考えられるが、ヒステリーはその一表現であるといえる。

一九二〇(大正九)年一〇月号の『婦人くらぶ』に発表された「三つの希望」の中では、「私はよく女性の人から私の創作中に出て來る女性について批難を受ける。その人達のいふ所に従えば、私の描出する女性は概していふと、いつでも私の描出する男性よりも低い水準にゐるか、ひねくれた性格を持つてゐる。女性は私によつてある侮蔑をうけてゐる、とのことだ。私は嘗て異性に対してそんな先入的な僻見を抱いてゐたつもりはないのだけれども、結果は或はさうなつてゐるのかもしれない」(注三七)と記されているように、当時の女性にも多少批難を受けていたことが分かる。

つまり彼の思想は、当時の社会には受け入れられず、避難を受けていたといえるが、このような社会に対する思想の受け入れ難さを葉子のヒステリーを通じてあらわしたのが、逆にその思想に対する反感によつて葉子の破滅を正当化するような解釈を可能にしたのではないかと考えられる。

また、当時は女性に対して良妻賢母育成という性抑圧的な教育が行われた時代であつたため、道徳的な側面から見ると葉子のような女性に対する社会的反感が高まるのは当然なことであろう。有島は特に、女性に要求されていた道徳的義務として挙げられている貞操の問題について、次のように記している。

貞操であれ、何であれ、ある道徳が要求される場合には、その道徳自身の為めに、要求されなければならない。その要求の背後に、他の目的が潜んでゐたならば、その要求は不純なものであつて、道徳夫自身に対する冒瀆である。人はこのような種類の道徳的要求に服従すべき義務を有たないし、また、服従するのが恥辱である。(中略)

ある種類の女子貞操論者に云はせると、未婚の女子は、恋愛を経験してはならない。一度、結婚した以上は、総ての軀を一身に背負つて、家庭の仕事に専一でなければならぬ。何等かの事情で良人と別れた以上は、生涯、独身を通さなければいけない。これが、彼等の主張する不文律である。しかしながら、實際の心の働きに於ける、女子の貞操とは、そんなものではないと、私は思つている。障生涯に一度だけより、

恋愛を経験しないといふことは、この上もない崇高な、さうして、幸福な運命である。けれど全ての人が、常にかくの如き運命を以て、恵まれて居ない。恋愛が二度来るとも、三度来るともあるだらう。その時、その人が当面の問題に対して、如何に真剣で、忠実であるかが、この場合大切である。これが貞操である。(注三八)

有島は、当時の恋愛や結婚において要求される女性の貞操の観念、その観念自体に問題があると指摘し、貞操上の自由を主張している。葉子が現在に至るまで悪女と評されているのは、おそらく有島が指摘している当時の貞操の観念が今でも通用し、性を武器にし、男性を翻弄し、不倫を起した女性に対する批判を可能にしたからではなからうか。

このように批判されるべき葉子が、ヒステリーによって破滅していくことに対しては、自業自得であるように読まれるのは当然かもしれない。しかし、有島におけるヒステリー観からみると、女性の性を抑圧するものであったヒステリーは、女性の性をあらわすものでもあったといえよう。葉子を破滅させる要因として用いられたヒステリーは、女性の性生活における疾患であると同時に、性の自由を実現した証拠でもあろう。本能的な生活の実現による性の自由こそ、本質的な意味としての女性の解放であるというような有島の思想が、ヒステリーを用いることによって具現されたのではないかと考えられる。

有島は一九〇七(明治四七)年三月二三日の日記に『アンナ・カレ

ーニナ』を讀了した後、アンナについて次のように記している。

彼女の生涯は嵐のようである。否、暴風雨である。彼女は、もし弱者に会うならば、それを打ち挫くであらうし、強者に会えば自ら打ち挫かれるであらう。而も彼女は、両者を避けようとはしない所か、そのどれかを捉える事を寧ろ好んでいる。(中略)世間は彼女を知っていないのだ。彼女はこの世の属しているものではないのだ。―迷子の天使とでも言うがよからう。可哀想な魂よ!!(注三九)

アンナに同情している有島は、ヒステリーによって破滅するアンナと同様に、葉子を破滅させたのである。しかし、自ら命を絶つというアンナの死に方に対し、葉子は婦人病の手術を行うなど、生きようとする意志がうかがえる。結果としては手術の失敗によって「痛い痛い……痛い」(四五三頁)と苦しむところで幕が降りるが、このような生きたいという葉子の願いは葉子の悲劇性をより強めているように思われる。有島の女性解放に対する思想は、当時の社会が性に対して閉鎖的な風潮であったことにより、受け入れられることが非常に難しかったと考えられる。ヒステリーによって破滅して行く葉子は、社会によって抑圧されている女性の性の自由を象徴するものであり、そのような性の自由は社会によって破滅させられたということができよう。

結び

有島武郎はフェミニストではあったが、当時支配的であった男性中心的な異性愛を自然に身につけ、女性の固有性を強調した結果、女性に対する偏見と差別をもたらしているヒステリーを葉子の破滅の要因として用いている。しかし、「或る女のグリンプス」から『或る女』への改作の時に、参考にした『性の心理』の影響によって変化したヒステリー観からみると、女性を抑圧するヒステリーが女性を抑圧したためにあらわれる一つの病であったことが分かった。おそらく有島は、葉子を罰するためにヒステリーを用いて破滅させたというより、社会が葉子をヒステリーにかからせ、破滅させたことをあらわすために用いたのではないかと考え荒れる。

「注」

- 一 江頭太助「H・エリスの『性の心理学的研究』の影響―『或る女』研究の視点―」『有島武郎の研究』、朝文社、一九九二年六月。
- 二 坪井秀人『性が語る』名古屋大学出版会、二〇一二年二月、五一頁。
- 三 前掲注二に同じ。
- 四 小坂晋『或る女』と『アンナ・カレーニナ』―比較対比研究序説―『岩手大学教育学部研究年報』(二二六)、一九六六年一月、二六頁。
- 五 エティエンヌ・トリヤ『ヒステリーの歴史』安田一郎、横倉れい訳、青土社、一九九八年五月、一六頁。

六 前掲注五に同じ。

七 荻野美穂『ジェンダー化される身体』勁草書房、二〇〇二年二月、一六七頁。

八 前掲注七に同じ。一七三頁。

九 前掲注七に同じ。一七三頁。

一〇 金子準二『日本精神病学書史明治編 日本裁判精神病学書史明治編』日本精神病院協会、一九六五年一月、五頁。

一一 竹内楠三『催眠術治療自在』大学館、一九〇四年七月、一〇頁。

一二 糸左近『男女学問病』金刺芳流堂、一九〇五年一〇月、七八頁。

一三 有島武郎「或る女のグリンプス」『有島武郎全集 第二巻』筑摩書房、一九八〇年二月、一三二〜一三三頁（以下の引用の書誌情報は同一であり、「グ」頁だけを表記する）。

一四 有島武郎「或る女」『有島武郎全集 第四巻』、筑摩書房、一九七九年一月、二五八頁（以下の引用の書誌情報は同一であり、「頁」だけを表記する）。

一五 船越幹夫『偏見というまなざし―近代日本の感性―』青弓社、二〇〇一年四月、八六頁。

一六 児玉修治『健脳法』内外出版協会、一九一〇年九月、四三〜四四頁。

一七 杉江董『ヒステリーの研究と其療法』島田文盛館、一九一五年七月、一〇頁。

一八 前掲注五に同じ。五二頁。

- 一九 前掲注五に同じ。四八頁。
- 二〇 前掲注五に同じ。四七頁。
- 二一 谷川健一編『憑きもの』三一書房、一九九〇年三月、一九二頁。
- 二二 門脇真枝『狐憑病新論』博文館、一九〇二年九月、一五九頁。
- 二三 有島武郎『観想録 第五卷〔訳〕』『有島武郎全集 第一〇巻』、筑摩書房、一九八一年一〇月、四五七頁。
- 二四 前掲注一九に同じ。
- 二五 糸左近『無藥療法』田村奈良吉・発行、一九〇七年二月、七二頁。
- 二六 前掲注二二に同じ。
- 二七 石田昇『新撰精神病学』南江堂、一九一〇年六月、一九九頁。
- 二八 ハヴロツク・エリス『性の心理 Vol.1 羞恥心の進化』佐藤春夫訳、未知谷、一九九六年一〇月、三二頁。
- 二九 前掲注一に同じ。九六頁。
- 三〇 前掲注二二に同じ。五一頁。
- 三一 江種満子『有島武郎の女性論』『文教大学国文』(三七)、二〇〇八年三月、四五頁。
- 三二 前掲注三二に同じ。
- 三三 宮本侑佳『有島武郎作品における女性像の諸相と変遷―「お末の死」から「星座」まで』『国語国文薩摩路』(五四)、二〇一〇年三月、一五六頁。
- 三四 有島武郎『内部生活の現象』『有島武郎全集 第八巻』、筑摩書房、一九八〇年一〇月、四四五〜四四六頁。
- 三五 前掲注二八に同じ。四四二頁。
- 三六 有島武郎『惜しみなく愛は奪ふ』『有島武郎全集 第八巻』、筑摩書房、一九八〇年一〇月、一六五頁。
- 三七 有島武郎『三つの希望』『有島武郎全集 第八巻』、筑摩書房、一九八〇年一〇月、二四七頁。
- 三八 有島武郎『感想―貞操上の自由―』『有島武郎全集 第九巻』、筑摩書房、一九八〇年一〇月、二四七頁。
- 三九 有島武郎『観想録 第十五卷〔訳〕』『有島武郎全集 第十二巻』、筑摩書房、一九八一年四月、二一五〜二一六頁。